慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『むらくも』奈良絵 解題・影印
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2010
Jtitle	三田國文 No.51 (2010. 6) ,p.53- 57
JaLC DOI	10.14991/002.20100600-0053
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20100600-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『むらくも』奈良絵　解題・影印

石川　透

解　題

室町物語には、孤本と呼ばれる、一点のみしか伝本が存在しない作品が多くある。しかし、よく探してみると、同内容の作品が出てきたり、場合によっては、つぎつぎと出てきてしまうこともある。

特に、海外の美術館や博物館には、そのような作品が多く見つかっている。拙稿「ボストン美術館蔵の絵巻について」（『むろまち』第一〇集、二〇〇六年三月）において紹介したように、ボストン美術館には、当時としては珍しかった『船の威徳』や『にんらん国』が存在していた。このようなことからも、海外での調査は、とても重要なのである。

また、奈良絵本や絵巻は、その美しい挿絵だけが取られ、屏風や襖に貼られてしまうことがよくある。それがさらにばらされて、挿絵だけで市場に登場することもしばしばあるのである。以前「『一寸法師』奈良絵　解題・影印」（『三田国文』第四五号、二〇〇七年六月）に紹介した『一寸法師』は、奈良絵本・絵巻の例は知られていなかったのである。

このように、奈良絵本・絵巻の断簡として、その一部分だけでも見つかれば、その存在が分かり、孤本ではないことが証明できるのである。

ただし、特に挿絵の一部分だけが残された作品の、題名の特定は難しく、私の手元にも相当数の不明断簡が存在している。要は、『一寸法師』のように、たった一枚でも作品名が明らかになるものもあるが、どの作品にも見られるような場面が描かれ、それ一枚が残されていたら、作品名を特定するのは不可能なのである。

そのような中で、五枚の断簡が残された一連の挿絵断簡が、『むらくも』という孤本とされていた作品であることが明らかになった。

『むらくも』は、市古貞次氏が「むらくも（翻刻・解題）」（『国文白百合』第一号、一九七〇年三月）に紹介されたように、東京大学国文学研究室に所蔵されている孤本の奈良絵本である。私も調査させていただいているが、『むらくも』の形態は、半紙縦型の奈良絵本で、表紙がない一連の御巫本の一つで

あった。したがって、『むらくも』という名前は、挿絵の裏に書かれている名前から名付けられた仮題である。制作時期は、江戸時代前期から中期にかけてと思われる。

『むらくも』の内容は、東大本によれば、以下の通りである。

近江国信楽に住むむらくもは、四十余年の女人不犯の誓いを立て、毎日、法華経一部を読む生活を二十五年続けたが、ある日、美しい女が訪れ、これと契ってしまう。女は絹七千疋等を作り上げ、これにより、むらくもは裕福になる。女は自分が十羅刹女であることを告げて、雲に乗って帰って行く。

この内容からわかるように、『むらくも』は、室町物語『蛤の草紙』や『観音の本地』と似た内容である。

今回紹介する横型奈良絵本の挿絵断簡五枚は、挿絵自体は内容の近い『蛤の草紙』や『観音の本地』、中でも後者の挿絵に近いものがある。しかし、女の訪れ方等から、『むらくも』であることは間違いあるまい。

実は、『観音の本地』もその伝本はきわめて少なく、所在の判明する本は慶應義塾図書館蔵横型奈良絵本のみであったが、数年前架蔵の横型奈良絵本が登場し、『室町物語影印叢刊　二〇　観音の本地』（三弥井書店、二〇〇五年六月）に紹介した。期せずして同じような内容で伝本の少ない作品が二つ出てきたわけだが、これは決して珍しいことではない。

ところで、今回紹介する『むらくも』の絵と、東大本の『むらくも』の書誌を比較できるように並べると、以下のようになる。

架蔵『むらくも』断簡
形態、奈良絵本、断簡五枚
時代、［江戸前中期］写
寸法、縦一六・五糎、横二二・八糎
表紙、なし
外題、なし
内題、なし
料紙、斐紙
本文、なし
奥書、なし

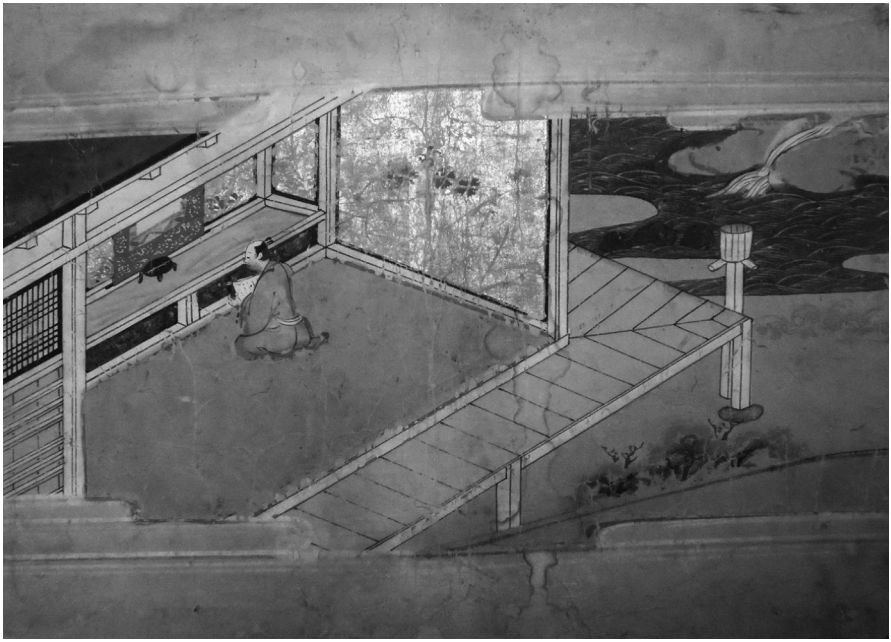
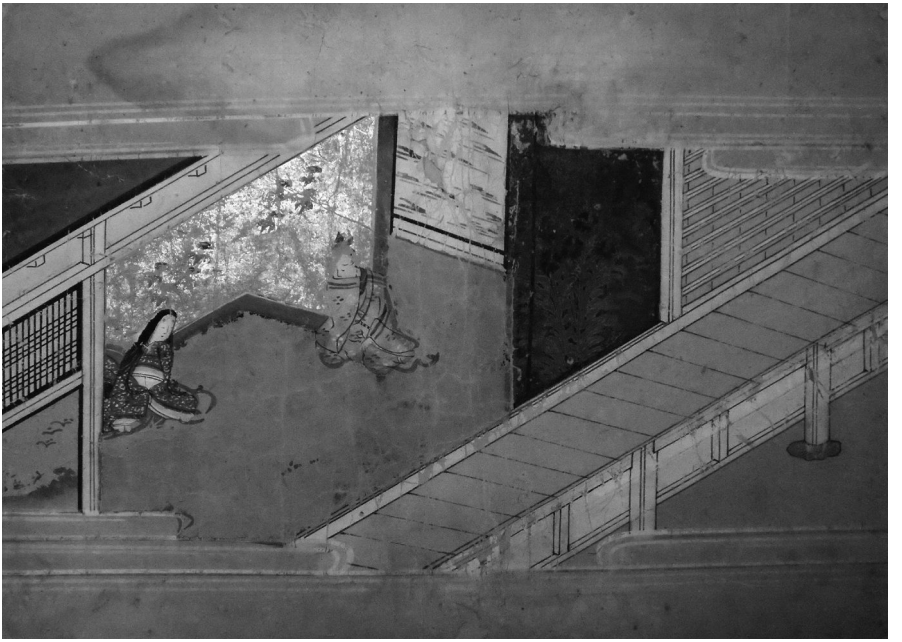
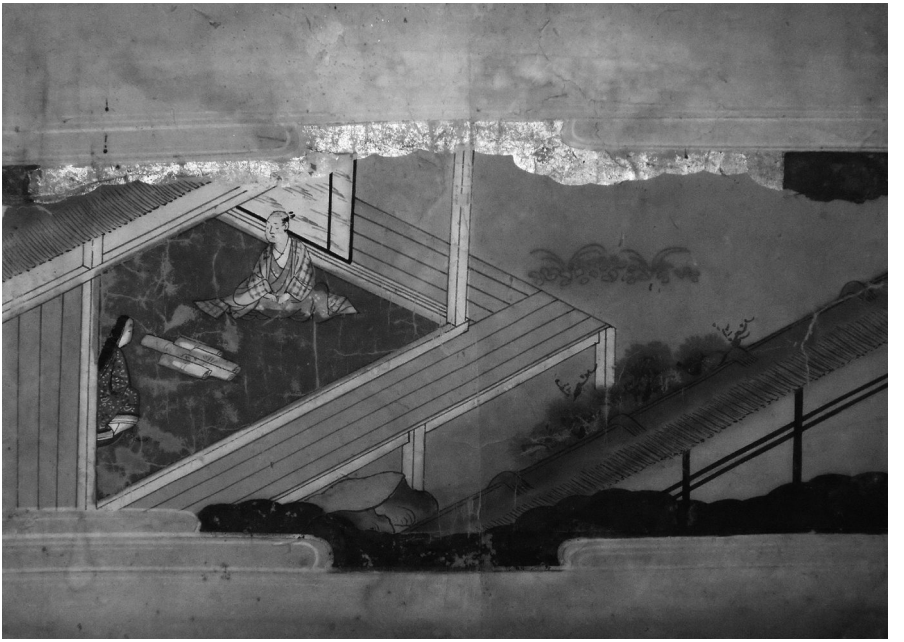
東京大学国文学研究室蔵『むらくも』
形態、奈良絵本、一帖
時代、［江戸前中期］写
寸法、縦二四・二糎、横一七・七糎
表紙、なし
外題、なし
内題、なし
料紙、斐紙
本文、九～一〇行
奥書、なし

この書誌の比較でわかるように、奈良絵本としてはほぼ同時

代に作成されたものと思われるが、形態は、架蔵本が横型であるのに対して、東大本は縦型であることがわかる。東大本は、縦型奈良絵本としては珍しく、各行上下に、書写の目安となる針穴が空いているから、横型の奈良絵本群と近い面も見られる。

また、絵の内容については、両者とも五枚ずつ描かれているが、第四図を除いては、ほぼ同じ場面、同じ構図である。第四図は、架蔵本の絵は、絹の反物を前にした二人の図だが、東大本は、むらくもが帝の前にいる場面である。

横型奈良絵本の一冊における挿絵の数は、だいたい五枚から六枚であるから、架蔵本の挿絵はこれで完結しているかもしれないが、東大本の題四図と同じ箇所が描かれていたかもしれない。

いずれにしても、本書の本文を中心とした残りの断簡が出てくればよいのであるが、それはなかなか難しいと思われる。

以下に、架蔵『むらくも』奈良絵本断簡挿絵五枚を、その順番と思われる順に掲載する。